

かつて暴力に晒されてきた子どもにとって暴力はどのような意味を持つのか：

— 児童福祉施設職員へのインタビュー調査を通して —

メタデータ	言語: ja 出版者: 福井大学総合教職開発本部 公開日: 2024-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣澤, 愛子, 稲月, 聡子, Hirosawa, Aiko, Inatsuki, Satoko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/0002000225

かつて暴力に晒されてきた子どもにとって暴力はどのような意味を持つのか —児童福祉施設職員へのインタビュー調査を通して—

福井大学学術研究院 教育・人文社会系部門 廣 澤 愛 子
岡山大学学術研究院 社会文化科学学域 (文) 稲 月 聡 子

【要旨】本研究では、過去に被暴力経験を有し、現在、暴力加害を行う福祉施設入所児童にとって、暴力がどのような意味を持つのかを明らかにするために、①子どもが暴力をどのようなものと捉えており、②どのような意図で暴力を振ったのか、の2点を検討した。具体的には、児童福祉施設職員29名に面接調査を行い、最も印象に残っている子どもの暴力事例について語ってもらった。面接内容は許可を得て録音し、その後、個人情報保護を確保した逐語録を作成した。逐語録をコーディングとカテゴリー化の作業を通して質的に分析した結果、暴力の捉え方について5つのカテゴリーが、暴力を振る意図について7つのカテゴリーが得られた。これらの結果からは、暴力の連鎖の最中にある子どもにとって暴力は独特の意味を持ち、暴力を振る意図も多様であることが示唆された。総合考察では、これらの特徴を踏まえた支援の在り方について検討した。

キーワード：児童福祉施設、子どもの暴力の捉え方、子どもが暴力を振る意図、暴力の連鎖、質的研究

1. 問題と目的

家庭内における暴力の被害経験が、後の暴力加害行動(攻撃性やいじめ、非行など)と関連することは、しばしば指摘されてきた(Yoon, et al, 2016 など)。福祉施設で暮らす子どもたちは、施設入所以前に被虐待経験などの暴力被害体験を有することも多く、身体的暴力をはじめとした外在化問題を引き起こす確率が高いことが指摘されている(Attar-Schwartz, 2008)。また逆に、被虐待経験を有する人が、いじめなどの暴力被害体験を重ねることもしばしば指摘されており(Benedini, Fagan, & Gibson, 2016 など)、被害・加害を問わず、「暴力の連鎖」(Wisdom, 1989)は、以前から大きな問題として認識されてきた。特に、児童福祉領域に関わる子どもたちは暴力の連鎖に苦しんでおり、例えばSterzing et al.(2020)の調査によると、児童福祉機関(child welfare system)に関わる青年期女子がいじめの加害及び被害に関わる頻度は、児童福祉機関と関わりのない女子と比較しておよそ7倍であると言う。また、日本は他国とは異なり、里親による家庭養護が定着しておらず、要保護児童の約80%が乳児院や児童養護施設等で養育されている。したがって、児童らが施設で暮らす期間が長く、施設が家庭の肩代わりをしている側面もあるため、施設における暴力の問題は解決すべき喫緊の課題と言える。

施設内で生じる暴力への対応に関する研究は少なく、暴力低減に有効な対応について、エビデンスに基づいた明確な方法は確立されていないと言う(Slaatto et al, 2021)。しかし臨床の現場では、日本においてもいくつかの取り組みがなされており、例えば田嶋(2011)は、

外部機関と児童福祉施設が連携して暴力の問題に取り組む「安全委員会方式」を創案している。これは、児童から職員への暴力のみならず、児童間暴力や職員から児童への暴力も含めて施設内暴力を同時に解決しながら子どもの成長促進を目指すものであり、着実な成果を上げている。そこでは、顕在化した暴力のみならず、潜在的な暴力も視野に入れ、子どもに対する定期的な個別面接と生活場面で暴力が起こっていないか把握するための不定期な見回りを通して、個と環境の両面から児童らの安全・安心を担保している。また、佐々木(2023)は、施設における暴力をはじめ、家庭や学校などで見られる暴力も含めて、思春期以降の児童及び保護者が暴力を手放すのを手助けするための4段階の支援モデルを提示している。具体的には、第0段階：暴力を止める同意を子どもから得て、暴力を手放す支援をセラピストが担っている理由を共有する、第1段階：暴力をアセスメントし、支援を受ける必要性と終結の目途を共有する、第2段階：個と環境に対する支援の実行、第3段階：暴力の手放しを定着させる、の4段階である。具体的な事例を通して、これら4段階の支援を通して子どもが暴力を手放す過程が示されており、同時に、その過程における支援者の在り方についても多くの示唆が得られる。また、佐々木(2019)では、児童福祉施設及び里親宅における子どもの暴力の防止と解決に向けた実践が数多く紹介されている。そしてこれらの実践を踏まえ、現在の暴力の背景にある過去の被虐待体験などを心理治療的に扱うことも重要ではあるが、現在の生活場面で生じている暴力加害あるいは被害への対応を軽視せず、優先的

に対応する必要性があること、顕在化した暴力だけではなく表からは見えない潜在化している暴力を、積極的に把握する態度が支援者には求められることが指摘されている。確かに国内外の研究において、児童福祉施設の生活場面における子どもの暴力への対応に焦点を当てた実証的研究は極めて少ない。先に挙げた田嶋(2011)に加え、CARE プログラムやトラウマインフォームドケア (Trauma-Informed Care: TIC)、コモンセンスペアレンティング (Common Sense Parenting: CSP) などを導入し、職員による子どもの暴力への介入や予防の質を高め、子どもの暴力が低減したことを明らかにした実践的研究が散見されるもの (Izzo et al, 2016, Bryson et al, 2017, 益田, 2010 など)、このような実践的研究は僅少である。加えて、各子どもの暴力の捉え方や暴力を振る動機はさまざまであるが、そのような各子どもの暴力の特徴を踏まえ、それに見合った対応を検討した研究は殆ど見当たらない。しかし、子どもらが暴力をどのように捉え、どのような意図をもって暴力を振り、それに対して職員らがどのような対応を行い、その結果、暴力はどのような変化を見せたのか (あるいは見せなかったのか)、その一連のプロセスを明らかにすることは重要である。なぜなら、このプロセスを明らかにすることによって、個々の子どもの暴力の特徴に応じた、効果的な対応を明らかにすることに繋がるからである。

そこで本研究では、このような一連のプロセスを明らかにするための第一段階として、まずは、児童福祉施設で暮らす子どもが暴力をどのように捉え、どのような意図をもって暴力を振るのかに焦点を当てる。具体的には、「子どもが暴力をどのようなものと捉えており、何のために暴力をふるうのか?」というリサーチクエスチョンを立て、日々子どもの暴力に向き合っている児童福祉施設の職員にインタビュー調査を行う。そして子どもの暴力に関する児童福祉施設職員の体験から、子どもにとっての暴力の意味を検討する。

2. 方法

(1) 調査協力者

児童福祉関連機関で働く専門職員 29 名 (男性 13 名, 女性 16 名, 平均年齢 35.9 歳, SD=10.9)。調査協力者は、「合目的サンプリング」(Draucker et al., 2007) の観点から、本研究のリサーチクエスチョン「子どもが暴力をどのようなものと捉えており、何のために暴力を振るのか?」に関するエピソードを豊富に語ることのできる人とした。そこでまず、虐待などの被暴力経験があり自らも暴力加害を行う子どもへの対応を頻回に行っている、児童養護施設の職員 15 名を対象者とした。次に、多様な暴力に対応しうる研究知見を得るために、暴力の中でも特に非行性を伴う子どもへの対応を中心に行う児童自立支援施設の職員 10 名を対象者とした。最後に、「理論的サンプリング」(Charmaz, 2006/2008) の観点から、

過去に児童福祉施設に勤務し、現在は児童相談所に勤務する職員 4 名を対象者とした。これは、児童養護施設及び児童自立支援施設に勤務する 25 名の調査協力者から得られたデータの分析により、施設内職員のみならず、施設外職員が施設内職員と協働して暴力に対応する場合がしばしばあることが明らかとなったため、子どもの暴力の捉え方や暴力を振る意図をより精緻に捉えるために、児童相談所職員にも追加調査を行った。

(2) 調査時期

2021 年 6 月～2022 年 3 月

(3) 調査方法

調査に先立ち、第 1 執筆者が所属する研究機関の倫理審査委員会において、調査の実施とその公表について承認を得た (受付番号: 第 68 号)。調査協力者に対しては、調査の目的と方法、面接内容を録音すること、得られたデータは研究目的以外には使用されないこと、個人が特定されないよう記述する形で研究として公表されること、調査協力は任意であり途中で取りやめても何ら問題がないこと等を、文書と口頭で説明した。そして調査協力者から文書で同意を得た後、調査を開始した。なお、録音の許可が得られなかった 2 名の調査協力者については、詳細な筆記記録を取ることで対応した。

調査は、ひとりひとり個別で半構造化面接を行った。具体的には、最も印象に残っている子どもの暴力事例について、1) 子どもの暴力の問題が発生した過程、2) その時の職員の対応、3) その後の暴力の展開 (収束)、の 3 点を構造化された質問項目とし、面接者との相互関係性の中で子どもの暴力に関わるエピソードを自由に語ってもらった。そして折に触れて、面接者が、「子どもが暴力をどのようなものとして捉え、どのような意図で暴力を振ったのか?」について、エピソードに出てくる各子どもに対する職員の考えや思いを聴取した。なお、ここでの暴力とは、児童から職員への暴力と児童間暴力のいずれも含む。面接時間は 32～68 分 (平均 52 分) であり、録音の許可が得られなかった 2 名を除くすべての職員の面接内容が、許可を得て録音された。そして、得られた録音データから逐語録を作成し、その際、個人が特定される情報はすべて匿名化して記述した。

(4) 分析方法

本研究では、子どもにとっての暴力の意味を検討することを目的としているため、分析テーマを「子どもは暴力をどのようなものと捉えており、何のために暴力を振ったのか?」とした。そして、繰り返し逐語録を読み、データの内容が具体性・多様性に富む協力者の事例から分析を開始した。まず 1 事例目について、分析テーマと関連のあるエピソード記述を抽出し、意味のまとまりごとに切片化し、その部分の内容を過不足なく的確に表す概念のラベルを付けた (=オープンコーディング)。次に 2 事例目の逐語録に対して、1 事例目で作成したコードを参照しながらコーディングを進め、新規コードの追

Table1 職員が捉えた「子どもの暴力の捉え方」

カテゴリー	カテゴリーの説明	該当事例数 (%)
コミュニケーション手段	暴力が、自分の思いや考えを伝える（具体例：怒りや哀しみを訴える）、人と関わる（具体例：相手を挑発する）といったコミュニケーション手段になっている。	17 (58.6%)
問題解決手段	暴力が、欲求不満の解消（具体例：イライラしていたから物を壊す）、説教を受けることの代わり（具体例：くどくど怒られるより、叩かれて一瞬で終わるほうが良い）といった問題解決方法になっている。	15 (51.7%)
愛情表現手段	暴力を相手への愛情表現と捉えたり（具体例：お父さんの手も痛かったはず。自分のためを思って殴ってくれた）、暴力を受け止めてくれるかどうかを相手の自分に対する愛情の大きさと捉えたり（具体例：暴力を振っても許してくれる人は、自分のことを愛してくれていると思う）、愛情を測る物差しとして、暴力を捉える。	7 (24.1%)
娯楽の一種	暴力を介したやり取りを相手も楽しんでいると捉える。	3 (10.3%)
暴力の正当化	懲罰的思考（具体例：悪いことをしたら叩かれて当たり前）や、自己防衛本能（具体例：やられる前にやる）等によって、暴力を用いることの正当性を主張する。	10 (34.4%)

総事例数 N=29

加と既存コードの修正を行った。これらのコードを、コード間、及びコードと原文の間で絶え間なく比較し、類似概念と相反する概念を明確化しながら、類似コードを集約してサブカテゴリーを作成した（＝フォーカスド・コーディング）。3 事例目以降は、切片化されたデータに既存のコードやサブカテゴリーを適用し、必要に応じてコード名やサブカテゴリー名を微修正した。また、既存のコードやサブカテゴリーが適用できない場合は、新たなコードやサブカテゴリーを生成した。最後に、29 事例を通して生成されたサブカテゴリーを、類似性と差異性という観点から比較・検討し、類似したサブカテゴリーをまとめる上位のカテゴリーを生成した（Table1・Table2）。

3. 結果と考察

(1) 職員が捉えた「子どもの暴力の捉え方」

コーディングとカテゴリー化の結果、子どもの暴力の捉え方としては、次の5つのカテゴリーが生成された（Table1）。すなわち、暴力を自分の思いや考えを伝えたり、人と関わるための手段として捉える【コミュニケーション手段】、暴力が、欲求不満の解消等の問題を解決するための手段となっている【問題解決手段】、暴力を振うことを相手への愛情ゆえのことと捉えたり、相手に暴力を受け止めてもらうことを自分に対する愛情の証と捉えたりする【愛情表現手段】、暴力を介して人とやり取りし、それを相手も楽しんでいると捉える【娯楽の一種】、暴力を振うことの正当性を主張する【暴力の正当化】、の5つのカテゴリーである。この中で、該当事例数が最も多かったのが【コミュニケーション手段】であり、29 事例中 17 事例が該当した。怒りや悲しみを、暴力を介して相手に伝えたり、相手を挑発するために暴力を振って相手との関わりを引き出そうとするなど、暴力

を用いて他者とコミュニケーションを取る様子が見て取れた。次に該当事例数が多かったのが、【問題解決手段】である。29 事例中 15 事例が該当し、イライラしている時に物に当たったり人に暴力を振ったりすることで発散する様子や、人に怒られるときに、「くどくど説教されるよりは叩かれて一瞬で終わるほうが良い」と考える様子などが確認された。つまり暴力が、ストレスフルな状況を改善するための手段となっていることが見て取れた。また、【暴力の正当化】も 29 事例中 10 事例が該当し、「悪いことをしたら叩かれて当たり前」といった懲罰的思考から暴力を当然のように振ったり、他者に対する不信任・警戒心から、「やられるまえにやらなければならない」と自己防衛的に暴力を振うなど、暴力を振うことを正当化している様子が確認された。さらに、【愛情表現手段】は 29 事例中 7 事例が該当し、例えば、虐待加害者である父に対して、「お父さんの手も痛かったはず。自分のためを思って殴ってくれた」と捉えるなど、暴力を愛情表現の一つと捉える様子が確認された。また、【愛情表現手段】には、「（自分が振った）暴力を相手を受け止めてくれるかどうかで、自分のことを受け入れてくれているかが分かる」といった在り方も含まれており、暴力を、愛情を測る物差しとして用いる様子が見て取れた。最後に、【娯楽の一種】は 29 事例中 3 事例が該当し、事例数は少ないものの、暴力に対する特異的な捉え方が明らかとなった。すなわち、「暴力を振られることを相手も喜んでいる」とか、「相手が暴力を望んでいる」と捉える様子が確認された。

なお、これら5つのカテゴリーは、1つの事例に複数のカテゴリーが該当する場合も多く、1例をあげると、周囲に対する警戒心から、少しでも自分が馬鹿にされたと感じると、自分の身を守るために相手に暴力を振り（【暴力の正当化】に該当）、相手が暴力で応戦してくると、

Table2 職員が捉えた「子どもが暴力を振う意図」

カテゴリー名	カテゴリーの説明	該当事例数 (%)
他者の気を引くための暴力	かまってもらいたい気持ちから暴力を振う。暴力が自分に向かう場合もある。	14 (48.2%)
相手を傷つけるための暴力	相手に憎しみや怒りを感じ、相手を傷つけようとして振う暴力。	8 (27.6%)
ネガティブな感情の発散を目的とした暴力	不安やイライラ、寂しさといった感情が生じたときに抱えきれず、暴力という形で爆発させる。暴力が自分に向かう場合もある。	20 (69.0%)
他者を支配するための暴力	他者に自らの力を誇示し、優位に立つための暴力。相手を自分の思い通りにしようとする暴力。	9 (31.0%)
自己防衛としての暴力	他者を遠ざけるために暴力を振ったり、他者に傷つけられる前に自分で自分を傷つけたり、ままならない現実から目を逸らすために暴力行為に埋没するなど、自分を守るための暴力。	10 (34.5%)
「破壊のための破壊」としての暴力	ただありとあらゆるものを破壊する、意図や目的は乏しいが、破壊性の大きい暴力。自分も他者も焼き尽くすような暴力。	5 (17.2%)
快楽としての暴力	人を傷つけることに喜びを感じている暴力。	3 (10.3%)

総事例数 N=29

イライラが募り、相手のみならず周囲の人に暴力を振ったり物を壊したりして、イライラを解消する（【問題解決手段】に該当）事例が確認された。

(2) 職員が捉えた「子どもが暴力を振う意図」

コーディングとカテゴリー化の結果、子どもが暴力を振う意図について、以下の7つのカテゴリーが生成された (Table2)。すなわち、周囲の人の気を引き、かまってもらいたいという気持ちから生じる【他者の気を引くための暴力】、相手に憎しみや怒りを感じ、それを相手にぶつけようとする【相手を傷つけるための暴力】、不安やイライラ、寂しさといった感情が生じたときに、それを抱えきれずに爆発させる【ネガティブな感情の発散を目的とした暴力】、他者に自らの力を誇示し、相手を思い通りにしようとする【他者を支配するための暴力】、他者を遠ざけたり、他者に傷つけられる前に自分で自分を傷つけたりする【自己防衛のための暴力】、ただありとあらゆるものを破壊する、目的性は乏しいが破壊性の大きい【破壊のための破壊】、人を傷つけることに喜びを感じている【快楽としての暴力】、の7つのカテゴリーが得られた (Table2)。

最も該当事例数が多かったのが【ネガティブな感情の発散を目的とした暴力】であり、29事例中20事例が該当し、次に該当事例数が多かったのが【他者の気を引くための暴力】であり、29事例中14事例が該当した。これらの結果からは、ストレスを発散しようという意図をもって暴力を振っていること、他者と関わるきっかけとして暴力が用いられていることが見て取れ、誤った習慣が身につけていることが示唆された。確かに前節においても、暴力が【問題解決手段】や【コミュニケーション手段】と捉えられていることが明らかになってお

り、児童福祉施設で暮らす子どもたちにとって、暴力は、身近で馴染みのあるストレス対処方法であり、誤った対人関係スキルである可能性が示された。ある職員は、「子どもを見ていると、相手に叩かれた方が、相手に関わってもらったという手ごたえを感じているのではないかと思うことがある。相手を叩いたときに、相手から叩き返されなかったら、まるで無視されたかのように捉えているように感じることもある。職員が、（叩き返すのではなく）言葉で応答しても、物足りないと感じているように見えることもある」と語った。職員のこのような語りからは、暴力が持つある種の強度のようなものを、子どもが習慣的に求めている様子が見て取れる。

また、【他者の気を引くための暴力】と【自己防衛としての暴力】では、暴力が自分に向かう事例が複数確認されている。例えば、【他者の気を引くための暴力】では、「指先の傷口を敢えて広げて出血させ、心配してもらおうとする」とか、「脱臼したときに職員から心配してもらった経験を踏まえて、何度も自ら肩を脱臼させて、職員の関心を引く」などのエピソードが語られた。そして、【自己防衛としての暴力】では、例えば、「職員に怒られる前に、自分で自分の頭をヘッドバンキングして自分を責め、怒られないようにする」などのエピソードが語られた。これらのエピソードからは、やり方は適切ではないものの、彼らなりのやり方で他者を希求し、また、他者から自己を守っていると言える。

最後に、29事例中26事例において、これら7つのカテゴリーが複数該当した。例えば、ある児童は、他者の気を引くために暴力を振うこともあれば、別の時には相手を傷つけるために暴力を振り、さらにまた別の機会には、自分の身を守るために、相手に暴力を振られる前に

自分で自分を傷つけるなど、状況に応じて異なる意図をもって暴力を利用していた。このような事例においては、いつも同じ対応をするのではなく、子どもの暴力の意図に合わせた対応・支援を行うことが暴力低減に有効であるかもしれない。一方、29事例中3事例は同じ意図をもって暴力を振っており、このこと自体が、その子どもの暴力の大きな特徴ともいえる。したがって、その子どもの暴力の特徴に応じた対応・支援を考案して実行することが、暴力低減に結びつくことが期待される。

4. 総合考察

本調査結果から、子どもの暴力の捉え方には特徴があり、また暴力を振る意図も多様であることが示された。一方、Table1とTable2を比較すると、暴力の「捉え方」と暴力を振る「意図」は重なる部分も多い。これは、暴力が何らかの“手段”になっており、子どもが暴力を手段として「捉え」、その手段の中に子どもの「意図」が含まれていることに拠る部分が大きい。いずれにせよ、暴力が子どもにとって何らかの“手段”になっているということが、まずは本調査を通して明らかになったことと言える。では、具体的に何のための手段になっているのかを職員の語りや生成されたカテゴリーから検討すると、子どもにとって暴力は、身近で馴染みのあるストレス対処法や誤ったコミュニケーションスキルとなっている可能性が示唆される。このような言わば誤った習慣を手放すにはどのような支援が必要なのであろうか。一つには、子どもが暴力に代わる有効なストレス対処法やコミュニケーションスキルを身につけ、その有効性を実感できるように促すことが肝要である。児童福祉施設職員は、児童が暴力を振った後、その出来事を振り返り、暴力に代わる方法を身につけられるようソーシャルスキルトレーニングなどを丁寧に行っていることが聞き取り調査から明らかとなった(廣澤・稲月, 2022)。このような地道な取り組みが大切であり、またその際、暴力に代わる別の方法でストレスに対処すると上手くいったという快体験を実感することが何よりも重要と思われる。コミュニケーションにおいても同様であり、暴力を用いなくてもうまくコミュニケーションが取れるという体験を、実感を持って重ねていくことが、暴力を手放すことに繋がるのではないだろうか。田嶋(2011)は、暴力には嗜癖性があることを指摘しており、ひとたび暴力という方法を身につけてしまうと、暴力を手放すことは難しいと推測される。したがって、暴力を強制的に取り除くよりも、暴力以上に魅力的であり、子どもにとって快体験に繋がるようなストレス対処法やコミュニケーション法を見つけることが、自ずと暴力を手放すことに繋がるのではないかと思われる。そして、自分に適したストレス対処方法やコミュニケーション法を身につけるためには、ソーシャルスキルトレーニングやストレスマネジメントの訓練を受けることに加え、自己理解を深める

こともまた重要である。自分の好きなことや嫌いなこと、人とどのような関わりを持ちたいと考えているのかなど、自分という人間について深く知ることが、自分に適したストレス対処方法やコミュニケーション法の獲得に結びつくのではないだろうか。つまり、習慣として身に付いた暴力を手放すには、暴力に特化した支援や訓練、治療のみを実施するのではなく、自己理解や社会性なども含めた子どもの発達全体、あるいは人格全体を育むような関わりが求められると言えるだろう。

次に、本調査結果からは、暴力が、他者の気を引いたり、他者に対する愛情を表現したりする手段となる場合があることが明らかとなった。構ってもらいたくてわざと自分を傷つけたり、わざと相手を怒らせるようなことをして関わりを引き出したりする様子が、職員へのインタビュー調査からは明らかとなった。しかし、たとえ本人がコミュニケーションの一形態として暴力を用いていたとしても、暴力を振られた側にとっては自分が傷つけられる体験に他ならず、相手に対してネガティブな感情を抱かざるを得ない。つまり、暴力を介して他者の気を引いたり愛情を伝えたりするという行為は、本人の意図とは裏腹に、相手に忌避されるという結果をもたらす。したがって、相手の気を引いたり愛情を表現したりするために暴力を振る子どもが暴力を手放すには、まずはこの事実—他者を希求するがゆえに振る暴力は、結果的に他者を遠ざけている—を知ることが重要である。「この方法ではうまくいかない」という事実を認めることが、暴力という方法に疑問を持つきっかけとなり、暴力を手放すことへの1歩となる可能性がある。また、職員の語りから、愛情表現として暴力を使う子どもの中には、相手が自分の暴力を受け止めてくれるかどうかで、自分に対する愛情の大きさを測る様子も確認された。夫婦間暴力などを目の当たりにしてきた子どもには、暴力が愛情を押し量る物差しのように映る場合もあるかもしれない。しかし、暴力をこのように捉える傾向にある子どもに対しては特に、職員をはじめ支援者は、「暴力を受け入れることはできない」ことを明確に伝える必要がある。「暴力は絶対にダメ」であり、「暴力を振ったら、信頼関係を失う」ことを明確に伝えることが、暴力の手放しを後押しすることに繋がる。暴力を振らざるを得ない子どもの立場を共感的に理解したり受容したりすると、子どもは「暴力は許される」と勘違いしてしまう。そしてますます、「どこまで暴力が許されるのか」によって愛情を押し測るようになり、逆に、「暴力を受け止めてもらえなかったら、愛されていない(拒絶された)」と受け止める可能性も出てくるだろう。佐々木(2023)は暴力を手放す支援において、最初に行うべきこととして、「クライアントから暴力を止めることへの同意を得る」ことを挙げており、その際、「現行法上(刑法, 児童福祉法等), 暴力を振ることは禁止されている旨の説明が基本」となると述べている。つまり、個々の状況に

応じてなぜ暴力を振ったのかと子どもに問うたり事情を考慮したりする以前に、そもそも大前提として、暴力は法律で禁じられていることをシンプルに伝え、暴力を止めることの同意を得ることが暴力を手放す支援の始点として重要である、と言えるだろう。また、このような大前提を職員と子ども間で共有することに加え、子どもが職員に対して暴力を振うような事例においては、「わたし(=職員)はあなた(=子ども)のいかなる暴力も受け入れません」と明確な姿勢を示すことも重要であろう。ここでは、わたしとあなたという2者関係において、「暴力を振われることを許容しない」と明言し、暴力が信頼関係を損ねるものであること、暴力は愛情表現にはならないことを子どもと共有することが肝要である。愛着に関わる課題が大きい子どもに対しては特に、2者関係における適切な距離感やルールは重要である。そして、職員が自分の身を守る姿勢を体現することは、ひいては、子どもが他者から暴力を受けそうになった時に「No」と言える力を育むことにも繋がるのではないだろうか。

さらに本調査結果からは、自己防衛のための暴力という側面があることも明らかとなった。子どもが自己防衛のための暴力を手放すことができるようになるためには、自己を傷つけたり卑下したりしなくても、他者に傷つけられることはなく、自分らしくいられるという安心感・安全感を持つことが、まずは何よりも重要である。逆に言うと、そのような安心感・安全感を感じられるような環境を施設が一丸となって構築していくことが必要不可欠である。田嶋(2011)が創案した「安全委員会方式」では、この安心・安全の大切さが繰り返し強調されている。そして、トラウマ治療はもちろんのこと、あらゆる心理臨床の現場においても、相談者が安心・安全を感じ、セラピストとの間にラポールを形成することは最優先事項である。さらに心理臨床の現場に限らず、一般企業においても、心理的安全性の高いチームや組織ほど、生産性が高いことが明らかにされている(Edmondson, 2018)。心理的安全性とは、人がその人らしく自然体でいることができ、誰かを恐れたりすることなく、言いたいことを率直に言い合えるような雰囲気の意味する。子どもたちが生活する施設自体が、このような心理的安全性を感じられる場になれば、自己防衛のための暴力を振う必要性自体が消褪していくのではないだろうか。もちろん、子ども個人が抱える自己肯定感の問題などにアプローチすることも重要であろうが、子ども個人の問題として捉え心理治療的な関わりをするだけでなく、環境を整えるという発想も、安心・安全というテーマに関しては特に重要である。

最後に、本調査結果から、快樂としての暴力や、目的性は乏しいものの破壊性が極めて大きい「破壊のための破壊」としての暴力などが明らかとなった。これらは、語られた事例数は少ないものの、他の暴力とは一線を画す特徴を備えていると言える。佐々木(2023)は、「クラ

イアントが禁忌を快と感じるような倒錯的傾向や精神病的傾向を持つ場合、手放す支援の適用は不適切である」と述べており、支援の限界に言及している。本調査で明らかとなった【快樂としての暴力】や【破壊のための破壊】としての暴力なども、これに類する種類の暴力である可能性がある。今後、このような暴力を、職員をはじめとした支援者がどのように捉え、考えていくと良いのかさらなる検討が必要である。

本研究の課題としては、子どもにとっての暴力の意味を捉えるにあたり、職員へのインタビューのみを実施している点が挙げられる。これは、子ども本人に暴力について問うことは、子どもが自らの暴力性に直面することとなり負担が大きいこと、また、筆者ら自身が子どもたちとより深い信頼関係を築くには今しばらくの時間を要する状況にあったことを考慮し、今回の調査では実施しなかった。しかし、子ども自身が自らの暴力をどのように捉えているのかについては、まずは本人に聞くというのが自然である。したがって、今後は、子どもたちへの面接調査も実施し、子ども本人、施設の職員、双方の立場から子どもの暴力について検討したい。そして、個々の子どもにとっての暴力の意味を踏まえた、個別最適な介入支援の構築について検討していきたい。

引用文献

- Attar-Schwartz, S. (2008). Emotional, behavioral and social problems among Israeli children in residential care: A multi-level analysis. *Children and Youth Services Review*, 30(2), 229-248.
- Benedini KM, Fagan AA, & Gibson CL. (2016). The cycle of victimization: The relationship between childhood maltreatment and adolescent peer victimization. *Child Abuse & Neglect*, 59, 111-121. doi.org/10.1016/j.chiabu.2016.08.003
- Bryson SA, Gauvin E, Jamieson A, Rathgeber M, Faulkner-Gibson L, Bell S, Davidson J, Russel J, & Burke S. (2017). What are effective strategies for implementing trauma-informed care in youth inpatient psychiatric and residential treatment settings? A realist systematic review. *International Journal of Mental Health Systems*, 11(1) doi: 10.1186/s13033-017-0137-3.
- Charmaz K. (2006). *Constructing Grounded Therapy: A practical guide through qualitative analysis*. London: Sage (抱井尚子・末田清子・監訳 グラウンデッド・セオリーの構築: 社会構成主義からの挑戦, ナカニシヤ出版)
- Draucker CB, Martsof DS, Ross R, & Rusk TB. (2007). Theoretical sampling and category development in grounded theory. *Qualitative Health Research*. 17(8), 1137-1148. doi:10.1177/1049732307308450

- Edmondson, EC. (2018). The fearless organization creating psychological safety in the workspace for learning, innovation, and growth. John Wiley and Sons (野津智子訳・村瀬俊朗解説 (2021) 恐れのない組織—「心理的安全性」が学習・イノベーション・成長をもたらす。英治出版)
- 廣澤愛子・稲月聡子 (2022) . 暴力の連鎖を防ぐ「環境及び他者の関わり」に関する研究—施設入所児童の暴力に対する職員の在り方・対応—, 日本子どもの虐待防止学会第 28 回大会 (ポスター発表) .
- Izzo CV, Smith EG, Holden M.J, Norton GI, Nunno MA, & Sellers DE. (2016). Intervening at the setting level to prevent behavioral incidents in residential child care: efficacy of the CARE program model. *Prevention Science*, 17, 554-564 doi.org/10.1007/s11121-016-0649-0
- 益田啓裕 (2010). 施設集団で暴力の起きない関係はどうしたら作れるか?—心理職の視点から—, 心理治療と治療教育, 21, 23-31.
- 佐々木大樹 (2019) . 児童福祉施設における暴力の防止と解決への実践の検討 京都大学大学院教育学研究科紀要, 65, 81-94.
- 佐々木大樹 (2023). 暴力を手放す—児童虐待・性加害・家庭内暴力へのアプローチ—, 金剛出版
- Slaatto A, Anneli VM, Lise CK, Gunn AB, & John K. (2021). Conflict prevention, de-escalation and restraint in children/youth inpatient and residential facilities: A systematic mapping review, *Children and Youth Services Review*, 127(1):C doi:10.1016/j.chidyouth. 2021.106069
- Sterzing PR, Auslander WF, Ratliff GA, Gerke DR, Edmond T, & Jonson-Reid M.(2020). Exploring bullying perpetration and victimization among adolescent girls in the child welfare system: bully-only, victim-only, bully-victim, and noninvolved roles. *Journal of Interpersonal Violence*, 35(5-6), 1311-1333. doi.org/10.1177/0886260517696864
- Yoon S, Steigerwald S, Holmes MR, & Perzynski AT. (2016). Children's exposure to violence : The underlying effect of posttraumatic stress symptoms on behavior problems. *Journal of Traumatic Stress*, 29, 72-79.
- 田嶋誠一 (2011). 児童福祉施設における暴力問題の理解と対応—続・現実に介入しつつ心に関わる—, 金剛出版
- Widom, CS.(1989). The cycle of violence. *Science*, 244(4901),160-166. doi: 10.1126/science.2704995

本研究は日本学術振興会科学研究費基盤研究 (C) (一般) (研究課題 / 領域番号: 21K01943) の助成を受けて、実施しました。

What does violence mean to children had been exposed to violence ? Examination from interviews with professional staffs in child welfare institution

Aiko HIROSAWA, Satoko INATSUKI

This study tried to clarify what violence means to children in welfare facilities who had been exposed to violence and are currently perpetrating violence. we examined the following two points: (1) What children consider violence to be, and (2) With what intention did they perpetrate violence? we interviewed 29 staffs working at child welfare facilities and asked them to talk about their most memorable case of child violence. The interviews were recorded with permission, and a verbatim transcript was subsequently prepared, with personal information protected. The transcripts were qualitatively analyzed through coding and categorization, resulting in five categories of how children perceive violence and seven categories of children's intentions to commit violence. These results suggest that violence has unique meanings for children in the midst of a cycle of violence, and that their intentions for committing violence are diverse. In the general discussion, we examined the nature of support based on these characteristics.

Keywords : child welfare institution, cycle of violence, how children perceive violence, what intentions children have in using violence, qualitative research